

東京八王子西ロータリークラブ会長賞

中山 太洋（なかやま たいよう） 大和田小 5年生

作品名:ユウキ

図 書:ユウキ

みなさんは、転校した友達を見送ったり、あるいは、自分が転校をして、悲しい思いをしたことはありますか。

この本の舞台は、転勤族の多い札幌の小学校です。この小学校に通う主人公ケイタは、何度も転校生を迎えたり、見送ったりしてきました。入学して以来、ケイタの前に現れ、ケイタの友達になった転校生の名前は、なぜかいつも「ユウキ」でした。一年生のときの仲良し「祐基」、二年生から四年生までのつきあいだった「悠樹」、五年生のとき一緒にサッカーに熱中した「勇毅」。親しくなればなるほど、いなくなった後の胸の痛みは、しばらく消えませんでした。

「せっかく仲良くなっても、またその友達が去っていくのを見送り、さびしい思いをするんじゃないだろうか。」そう思いながら六年生になったケイタが迎え入れたのは「優希」という女の子の転校生です。この四人目の「ユウキ」との出会いで、ケイタは、人との出会いや別れには意味があることを知ります。それは、優希が、「いなくなったりしていないわ。どこかにいるはずよ、この世界のどこかに」と教えてくれたからです。

ぼくは長野県で生まれて、二歳のとき父の転勤で東京の日野市に引っ越してきました。日野市の社宅は、この本の舞台のように、転勤族が多く、全国各地からいろいろな家族が転入してきては、全国各地へと転出していきました。ぼくがものごころのついた三歳の頃、お隣に引っ越してきた、一歳年下の「しょうちゃん」とは、すぐに仲良しになって、公園で遊ぶ時はいつも一緒でした。一人っ子のぼくにとって、「しょうちゃん」はとてもかわいい弟のような存在でした。そのしょうちゃんが、ぼくが四歳の時、和歌山県に転出していった日のことは忘れられません。もう会えなくなるさみしさと、もう知らない！という怒りにも似たどうしようもない気持ちでいっぱいでした。しょうちゃんの車が見えなくなるまで、泣きながら何度もバイバイと手をふり、走ってついて行ったのを覚えています。ケイタと同じように、「こ

んな悲しい別れがあるなら、いっそ出会わなければよかった」と思いました。ケイタは何度も何度もそんな切ない思いをくり返し、大切な人との別れに心を痛めてきたのかと思うと、ケイタがかわいそうに思えました。

だけどぼくは、転校生「ユウキ」の気持ちも分かります。なぜなら、ぼくも一年生の時、日野市から八王子の小学校に転校したからです。日野市の小学校に入学した時、初めてできた友達の「しゅんすけ」とは、「ケンカするほど仲が良い」の言葉通りの間柄でした。一年生の夏休みに、新しい家に引っ越して、今の小学校に来た二学期は、クラスになじめず前の学校の方が良かったと思っていました。親友と呼べる友達がたくさんできた今は、この小学校に来て本当に良かったと思います。

ぼくがこの本を読んで一番印象に残った場面は、ケイタが祐基にもらったカード二枚と、優希が持っていたカード一枚をつないで、カードに書いてあることを解読した場面です。カードをつなげると次の言葉になりました。「ときがわれらをへだてても あいとゆうじょうがあるかぎり いつかまためぐりあう そのひをまて ゆうきをむねに」

この言葉は、「転校という悲しい出来事があっても、相手を思いやる気持ちと友達との絆を忘れないかぎり、いつかまた出会える日がくる。だから勇気を出して、一日一日を大切に生きよう。」という意味なのだと、ぼくは思います。これから、相手を思いやる気持ちと友達との絆を大切にしていきたいです。大切なことを教えてくれて、ありがとう。「ユウキ」。